

【あまったれ】

山田くんは、甘〜いおやつをいっぱい隠しもっている。
それをいつも自慢している。
うらやましいというか、くやしいというか。
どこに隠してあるかは教えてくれない。
懐爺に占ってもらってもわからない。

山田くんは、なにか勘がはたらいたのか、ぼくにきいてきました。
「金ちゃん、おいらのおやつ、盗まなかったかのう」
「わしは、しらんぞい。だんごか、おはぎか」
疑われたので、あたまにきた。
「まんじゅうじゃ。たしか十個あったんだが、どう数えても九個しかありやせん」
「さいなんじゃのう。もしかして、【あまったれ】のせいかもしれんぞい」
「【あまったれ】たあ、なんじゃ」
おっ、ひっかかかってきた。
「おやつをぬすむ、おぼけじゃ」
「おぼけたあ、おそろしいのう」
「おやつをかくす、ばしょを、かえるべきじゃ」
「そうかのう」
「ばしょがだいじじゃ。もしかして、うちのなかじゃあんめえな」
「そらあたりめえじゃ。押し入れのなかじゃ」
「それがいかん。【あまったれ】は、いえのなかじゃったら、すぐにみつける」
「困ったのう」
「さっさとかえんと、また【あまったれ】にやられるぞい」
「だば、庭の便所にするかのう」
便所かあ。
まあしかたないか。
「それでええ。あそこなら、いちおうそとじゃし、くそうて【あまったれ】も、ちかづかんじゃろ」

夜になってぼくが、山田くんの家の庭の便所に行くと、あった、あった、紙入れの木箱のなかに、まんじゅうがあった。
ぼくはすぐに、一個、二個、三個、ぺろり食って、腹をさすっていると、とつぜん家から山田くんが出てきました。
「やっぱし金ちゃんかあ、【あまったれ】の正体は、金ちゃんかあ」
「あほぬかせ。ふるくてくさい、まんじゅうなんか、くうもんかい。わしはべんじよ、かりとるだけじゃ」
ぼくは、ずぼんをずりあげるふりをしました。

「まんじゅうが、へつとる」

「あほぬかせ。かぞえてやっから、みてろい」

「あいよ」

「いっこ、にこ、さんこ。ええと、いま、なんじじゃ」

「七時じゃ」

「しちか。だば、はちこ、きゅうこ、じゅっこ。ほらみい、【あまったら】にぬすまれたぶんも、とりもどしてやったぞい」

「ほんまじゃ。金ちゃん、すまんのう」

「なんのこれしき」

「お礼に、まんじゅうあげるぞい」

山田くんがぼくの目の前に、まんじゅうを突き出しました。

ぼくはおもわず、げっぷをしました。

「不思議じゃのう。金ちゃんのげっぷは、まんじゅうくさいのう」

「きのせいじゃ」

といて、帰る道すがら、気味のわるいおやじに逢いました。

暗いなかで、眼ばかりが光っています。

「金ちゃんですかあ」

「おまえはだれじゃ」

「【あまったら】で一す」

「げっ」

まさか。

「金ちゃーん。まんじゅうのげっぷ、出るそうですねえ」

「まあな」

「そのげっぷ、【あまったら】に、くださーい」

「えええ」

ぼくは逃げた、逃げました。

すぐに【あまったら】は追いかけてきましたが、ぼくの足にかなうわけはありません。

途中でへばって、動けなくなっていました。

死んでいるかもしれませんが、戻るつもりはありません。

いや、戻れません。

まんじゅうの下呂を吐いて、ぼくのほうもまったく動けなくなっていたのです。